

8) 結節性硬化症の1剖検例

武内 広盛・不破野誠一  
後藤 雅博・種市 愈 (国立療養所)  
大森 隆・五十嵐善男 (犀潟病院)  
卷瀧 隆夫・林 茂信  
小柳 新策 (東京都精神医  
学総合研究所)

結節性硬化症 (Bourneville 病) の1例の剖検所見を報告し、グリア線維酸性蛋白 (GFAP) の免疫組織化学で中枢神経系に認められた、星膠細胞の微小な島状の増生を報告する。

症例：23才、女性。家族歴に同疾患は見られない。生後7カ月よりてんかん、精神発育遅滞を認めた。19才の時、顔面に紅黄色の丘疹 (生検にて angio-fibroma の診断)、軀幹に序列性の弾性軟の隆起結節を認め、結節性硬化症と診断された。麻痺性イレウスを併発して死亡された。神経病理学的所見 (剖検番号 SN127、頭部のみ局所解剖)：脳重 1350g。大脳の外表に白く硬い斑状の結節が散在し、その剖面は皮質と白質の境が明らかでなく、一様に白っぽかった。組織学的には線維性および異形性星膠細胞の著明な増生から成っており、GFAP 染色で強く染色された。白質にも異所性に神経細胞や異形性星膠細胞からなる病巣が散見された。脳室壁には多数の米粒大の白色結節が見られ、脳弓前方部では直径1cmの腫瘤となり、組織学的には subependymal glia の増生および subependymal giant cell astrocytoma であり、石灰沈着を伴っていた。以上は、結節性硬化症としての典型的な病理所見であった。

GFAP 染色では、星膠細胞の微小な球状の増生巣が肉眼的な結節を認めない大脳皮質に散在して認められた。肉眼的な結節の周囲に多い傾向があった。肉眼的な結節の認められなかった小脳でも、Purkinje 細胞層に多数の星膠細胞の微小結節が染め出され、分子層にグリア突起を放散させていた。

まとめ：星膠細胞の微小結節は、その部の神経細胞の異常を光顕上指摘し得なかったこと、このような微小結節は他の疾患では見られないこと、肉眼的な結節に接して多く認められたことから、本症の基本的な病変の1つと考えられ、本症の病理発生を考える上で重要な所見と考えられた。

9) 松浜病院入院患者の自覚的屈折検査成績について

若林 瑞穂・腰越 直也 (松浜病院)  
木村 重男

松浜病院入院患者のうち、自覚的屈折検査の可能であった男子患者94名における成績を報告した。検査期間は昭和61年11月から63年10月までの2年間である。94名中1回だけ検査したものは40名、80眼、2回以上検査したものは54名、704眼である。成績を要約すると下の如くなる。

- (1) 乱視、特に倒乱視を認めることが多かった。検査した784眼中333眼、42.5%に乱視が検出された。直乱視と倒乱視の比率は直乱視21%、倒乱視79%で、各年齢層に分けてみても、この比率に大きな差を認めなかった。
- (2) 2回以上検査出来た54名に付いてみると、乱視は一過性に出没することがわかった。704眼中304眼、43.2%に乱視が検出された。うち直乱視は52眼、7.4%、倒乱視は252眼、35.8%であった。直・倒の比率は17.1%対82.9%である。なお乱視の程度は軽度のものが多く、304眼中266眼、87.5%は-0.5D以下であった。

これを患者数で見ると、54名中乱視出現なし10名、18.5%、直乱視出現14名、26% (ただし、直乱視のみのは1名、1.9%)、倒乱視出現43名、79.6% (ただし、倒乱視のみのも30名、55%)、経過中に直・倒両乱視が出現したものの13名、24%の成績であった。

- (3) 2回以上検査できた54名について、0.5D以上の屈折度の変動を示したものは、片目だけのもの15名、28%、両眼とも変動したものは28名、52%、計43名、80%であった。変動の程度は、0.5Dから1.25Dの範囲のものが多く、全体の83%を占めた。なお、屈折度の変動を見なかったものは11名、20%であった。

- (4) 自覚的屈折検査成績が検査の度に変動することに關し、実例を示しながら、原因について若干の考察を試みた。一見安定しているように見える患者においてさえ、何らかの精神的動揺があり検査成績に微妙な影響を与えているように思われた。

10) 精神発達障害の行動異常に対するカルバマゼピン及びハロペリドールの反応

阿部 弥生・藤田 菜生 (新潟大学精神科)  
田先由紀子 ( " 教育学部)  
小泉 毅 (精神保健センター)

今回我々は、精神発達障害児の問題行動に対して、主としてCBZ+HPDの併用療法を行い、臨床所見、薬剤血中濃度、脳波所見について検討した。

対象は、新潟大学附属病院精神科および新潟県立コローニ白岩の里診療所に通院している精神遅滞7例、自閉症7例、注意欠陥障害 (ADD) 2例の計16例である。薬剤の1日の投与量は、HPD が0～5mg, CBZ が75～600mg で、1日の平均用量は HPD が1.53mg, CBZ が264mg である。治療効果の判定基準は、薬剤の投与による症状改善度によって、著効・有効・微効・無効の4段階に分けた。判定に際しては、主治医の観察結果に基づいたが、判定の補助として投与前後に小児行動質問表を用いた。

CBZ の血中濃度は、競合反応を利用した蛍光偏光面免疫測定法により測定した。HPD の血中濃度は、富樫による HPD にたいする Monoclonal Antibody を用いて関根らの方法に準じておこなった。

今回我々が、小児の発達障害に CBZ と HPD を用いた結果では、症例16例中、有効率は81%で、症状別では、特に不眠に100%の改善率をみた。また、最も改善されにくかったのは常同・儀式行為で、特に自閉症では7例全例が改善がみられなかった。

また、有効例での平均薬剤使用量は、CBZ が263mg, HPD が1.33mg である。CBZ, HPD とも、投与量と血中濃度との間に用量依存性はみられなく、血中濃度と効果との間にも相関はみられなかったが、これは CBZ が HPD の血中濃度を低下させること、そもそも CBZ・HPD とも投与量・血中濃度との間に用量依存性が低く、効果発現にも個人差が大きいのではないかということが考えられた。

また、著効例に脳波異常が多く、無効例に正常脳波所見が多くみられたという結果については、CBZ がてんかん性精神病に有効であるという事と関連があると思われる。

副作用は、振戦・反応性の低下が1例ずつのみで、全体的にみて、CBZ と HPD の併用療法は有効性が高く、副作用が少ないということが言えた。

#### 11) カルバマゼピンが有効であったラピッドサイクラー

若穂 徹	(五日町病院)
砂山 徹	(白根緑ヶ丘病院)
不破野 誠一	(国立療養所犀潟病院)
宮下 理	(黒川病院)
伊藤 陽	(新潟大学精神科)

そううつ病相を頻回に繰り返す症例は Rapid cycler と呼ばれ、その特有な病態から注目されている。今回我々は carbamazepine (CBZ) が有効であった rapid cycler

を経験したので若干の考察を加えて報告する。症例1は24才の女性で、入院前1年半にわたり約2週間の周期でそううつの病相を繰返し某精神病院で入院治療を受けていたが症状は改善しなかった。今回はそう状態で受診し、入院後、約2週間周期の rapid cycling が確認された。病相の移行は急激におこり寛解期を認めなかった。そう状態の際には爽快気分、多弁、多動、不眠、観念奔逸を認めた。抑うつ状態の際には抑うつ気分、意欲低下を認め、動作緩慢となり、終日臥床するようになり、昏迷に至ることもあった。抗うつ剤、リチウムを使用した効果がなく、CBZ 200mg より投与開始したところ、症状が軽減し、600mg に増量後約2週間で remission となった。その後 CBZ 単独で維持しているが再発をみていない。症例2は74才の男性。そう状態で入院し oxypertine 投与後、症状が軽減したが、switch を起こし、昏迷状態に移行した。その後そううつの周期を繰返していたが、CBZ 200mg の投与後、2週間で remission となった。外来通院後も安定していたが、服薬中断後再び manic となった。CBZ の再投与により前回と同様に2週間で remission となった。症例3は30才の女性、母方の叔父が depression で入院治療を受けている。第1子出産後に発症、1週間うつ状態とそれに引き続く、2、3日のそう状態の繰返しが出現。某病院の精神科受診し治療を受けたが症状は不変であった。再び妊娠したが不安のため中絶したところ、その後上記症状は完全に消失した。しかし第2子出産後、再び rapid cycling が始まりほぼ1年続いていた。当科受診後、CBZ の投与により、そう病相は消失し、depressive な時期も不規則になり軽症化した。

今回の症例では3例中2例が女性であり、1例に遺伝的負因を認めた。そう症状として爽快気分、多弁、多動、不眠を共通に認めた。うつ症状としては抑うつ気分の他に抑制が共通して見られ、特に2例では昏睡状態にまで至った。rapid cycling の発現と使用薬剤との関連は薄いように思われた。また rapid cycling は甲状腺機能低下症の既往を有する者に多いとの報告があるが、3例とも末梢甲状腺機能は正常であった。CBZ の投与量としては200～600mg との比較的少量で効果がみられている。血中濃度は3.0～6.2 $\mu$ g/dl の範囲であった。症例2では服薬中は remission であったが服薬中断後もなく再発しており、症例1では CBZ の維持療法で再発をみていない。これらは CBZ の予防効果を示すものと考えられる。また症例1のように Li 無効例に CBZ が有効な例があることは注目に値する。